



■ “社会を明るくする運動”とは

全ての国民が、犯罪や非行の防止と罪を犯した人たちや非行をした少年たちの更生について理解を深め、それぞれの立場において力を合わせ、犯罪や非行のない安全・安心な地域社会を築こうとする全国的な運動です。

中ロドラマゴンズ賞(中学生の部)

本場の思いやり

田原市立東部中学校 三年 今川 望

中学生の今、幼いころに比べ、電車に乗る機会が増えてきた。車内では、おしゃべりを楽しんだり、窓の外の景色を見たりする。そして、電車が駅に停まると、どんな人が乗ってくるのか、つい気になって見てしまう。それは幼いころのある出来事のせいだ。

私がまだ保育園に通うころのことだ。母と私が二人で出かけたときのことだった。そのとき乗った電車は、比較的混雑しており、すぐには座ることができないでいた。私たちは、車両の真ん中あたりに空いている席を見つけ、なんとか座ることができた。これからしばらく、母と二人、短い電車の旅だ。まもなく、出発するとうとき、二人の夫婦らしき高齢の方が乗ってきた。両手に紙袋を持ったおじいさんと、片足を引きずって歩くおばあさん。おじいさんとおばあさんは、車内をきよるきよると見渡した。そして、出入り口の閉ドアのところまで行き、手すりにつかまって立った。それを見ていた私は、おばあさんに向かって、「この席、おじいさん。」と言った。

母もこのときはよく覚えていっている。機会があることに思い出しては、私に話してくれる。つい最近もまた、このときのことについて話し始めた。

「あのときは、びっくりしたよ。まだ小さいノンちゃん、教えてもいないのに、席を譲るなんて。あのときのノンちゃん、本当に偉か

ったよ。」

「何回も聞いている話なので、さ、はいはい。その話。前にも聞いたって。そんなに偉いと思ったなら、お母さんが席を譲ればよかったでしょ。あのとき、どうして席を譲らなかったの。」

「と言ってしまった。すると、想像もしていない答えが返ってきた。」

「お母さんはね、あの夫婦が一駅か二駅くらいで降りるから、あの場所に立っていただけだったの。私たちの席は開閉ドアから遠かったでしょ。」

それを聞いて、私ははっとした。幼いころの記憶をたどり、あの夫婦が私たちより先に降りていたのを思い出した。おばあさんにとって、私の譲った席は不便だったに違いない。私が席を譲った行動は、「本場の思いやり」だったのだろうか。

「おばあさんに悪いことしちゃったな。」

「そんなことないよ。だって、あのおばあさん、すごく喜んでくれたよ。きっと、ノンちゃんの思いやりの気持ちがうれしくて、受け止めてくれたんだよ。」

と母は言ってくれた。

思いやりとは、見返りを求めず、相手の気持ちを考えて行動することである。しかし、たとえ良心に従った行動であっても、相手の状況や気持ちをよく理解できていないこともあるのだと知った。思いやりは、自己満足ではないのだ。

私が起こした「席を譲る」という行動は、「思いやり」の心があつたから起きた行動だ。そして、おばあさんの気持ちを考えて、あえて声をかけなかった母の行動も「思いやり」である。おばあさんが、幼い私を気遣い、私の

行動に応じてくれたのも「思いやり」の心からである。あのとき、勇気を振り絞って声をかけた私。もし、おばあさんに断られていたら、ショックを受け、悲しい気持ちになっただろう。私は、あのときのおばあさんに感謝している。

母は、話の最後に、

「ノンちゃんが席を譲ったとき、車内の空気が変わったよ。」

と言った。それは、周りにいた人たちの心にも何か響くものがあつたということだろうか。そう考えると、私が起こした行動は、意味のあるものだったに違いない。私は、何度も同じ話をする母の気持ちが、なんとなくわかった気がした。

今、電車に乗って、同じような状況にあつたとしたら、私はどうするだろうか。やっぱり、私は、

「この席、どうぞ。」

と声をかけるだろう。しかし、前とは違う。周りをよく見て、相手の気持ちを想像して行動しようと思う。相手のことを考えた行動であれば、思いやりの心はきっと伝わるのだ。

無関心な現代。都会のマンションでは、隣人の名前も顔も知らないということもあると聞いた。電車の中では、多くの人々がスマートフォンに夢中になっている。周りに無関心でいては、思いやりの行動は生まれえない。自分の周りに関心をもつことで、見えてくるものもあるはずだ。

スマートフォンではなく、周りに目を向けてみよう。自分にできることが、きっとあると思う。困っている人がいるとき、あなたならどうするだろうか。

※なお、受賞者の学校名・学年は受賞時のものです。